

沖縄県COVID-19入院待機ステーションでの看護支援

著者	伊良波 賢
雑誌名	沖縄県立看護大学教育実践紀要
巻	8
号	1
ページ	33-33
発行年	2022-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1757/00000422/

支援の経緯と実績

国内では 2021 年 4 月から 6 月上旬にかけて、COVID-19 の第 4 波が到来し、とくに大阪や札幌において医療提供体制の逼迫が起こった。沖縄県における第 4 波の到来は大阪や札幌から数週間遅れ、5 月中旬から急激に患者数が増加し、大阪や札幌のように本県においても医療提供体制が逼迫した。入院病床の逼迫を受け、県外事例で見られた搬送困難事例の発生、医療管理下に置かれず在宅で死亡する事例が予想されたため、支援体制の強化と効率的な医療提供体制の確保が求められ、県内にも入院待機ステーションが設置されることが決定した。そこで沖縄県感染症対策課から本学へ支援要請があり、私が学外応援業務を担うこととなり、第 4 波（期間：6/9～6/23）と第 5 波（期間：8/1～9/18）の計 2 回、64 日間、看護統括として業務に携わることになった。

入院待機ステーションとは、災害時の仮設救護所のようなものである。「トリアージ」、「サポート」、「バッファー」という 3 つの役割機能を理解し、周知浸透させながら、様々な背景を持ち県内外から応援にかけつけた看護師へ忙しい中でもやりがいを持てるような関わりを続けていくことを意識し看護統括業務を行っていた。看護業務の実際としては、夕方から朝方にかけて患者を受け入れ、療養上の世話をを行いながら、酸素投与を中心とした呼吸管理、輸液、内服薬投与、患者の訴えを聞き、代弁者となって調整担当者へ伝えること、そして日中に自宅や病院等へ退所させていくことであった。感染者数の推移や逼迫している業務への応援など、その時々に応じて看護業務も少しずつ変化させながら対応していた。私自身もスタッフと同様に感染区域であるレッドゾーンで看護業務を行いながら、いかにスムーズに業務が遂行できるか、患者と勤務者の安全を守れるかとスタッフと共に試行錯誤しながら働く毎日であった。

看護統括業務の多くを占めていたのは、看護師確保とその調整であった。施設を立ち上げるにあたって、何人の看護師が必要か、必要病床を運用するためにはあと何人いればよいかと県庁担当者と調整を行い、開所後は毎日追加されていく志願してきた看護師へのオリエンテーションと勤務調整に追われていた。県内外の DMAT、陸上自衛隊看護班、病院事業局、沖縄県看護協会、民間病院で勤務する看護師の時間外での応援や看護師派遣会社等の協力を得て、第 4 波と第 5 波をなんとか凌ぐことができた。このような施設の開設と運用は、看護師だけではなく県庁担当者をはじめとして、本当に多くの方々の働きの上に成り立つものであると痛感させられた。私と関わって下さった皆様に、厚く御礼を申し上げるとともに、ここでの貴重な経験を今後の看護実践に反映させていきたいと考える。

With コロナに向けて

新興感染症によるパンデミックは、地震や天災のようにひとつの災害であるという認識が重要だと考える。日頃からの備えが重要であり、感染予防行動もそのひとつにあたるのではないだろうか。今回の経験で、多くの方々と関わることができた。次の災害に備えて、スムーズに連携が行えるよう、日頃の何気ないコミュニケーションを大切に、互いの顔が見える関係性を築いていきたいと考える。
